

水落遺跡の調査

水落遺跡第10次発掘調査現地見学会資料

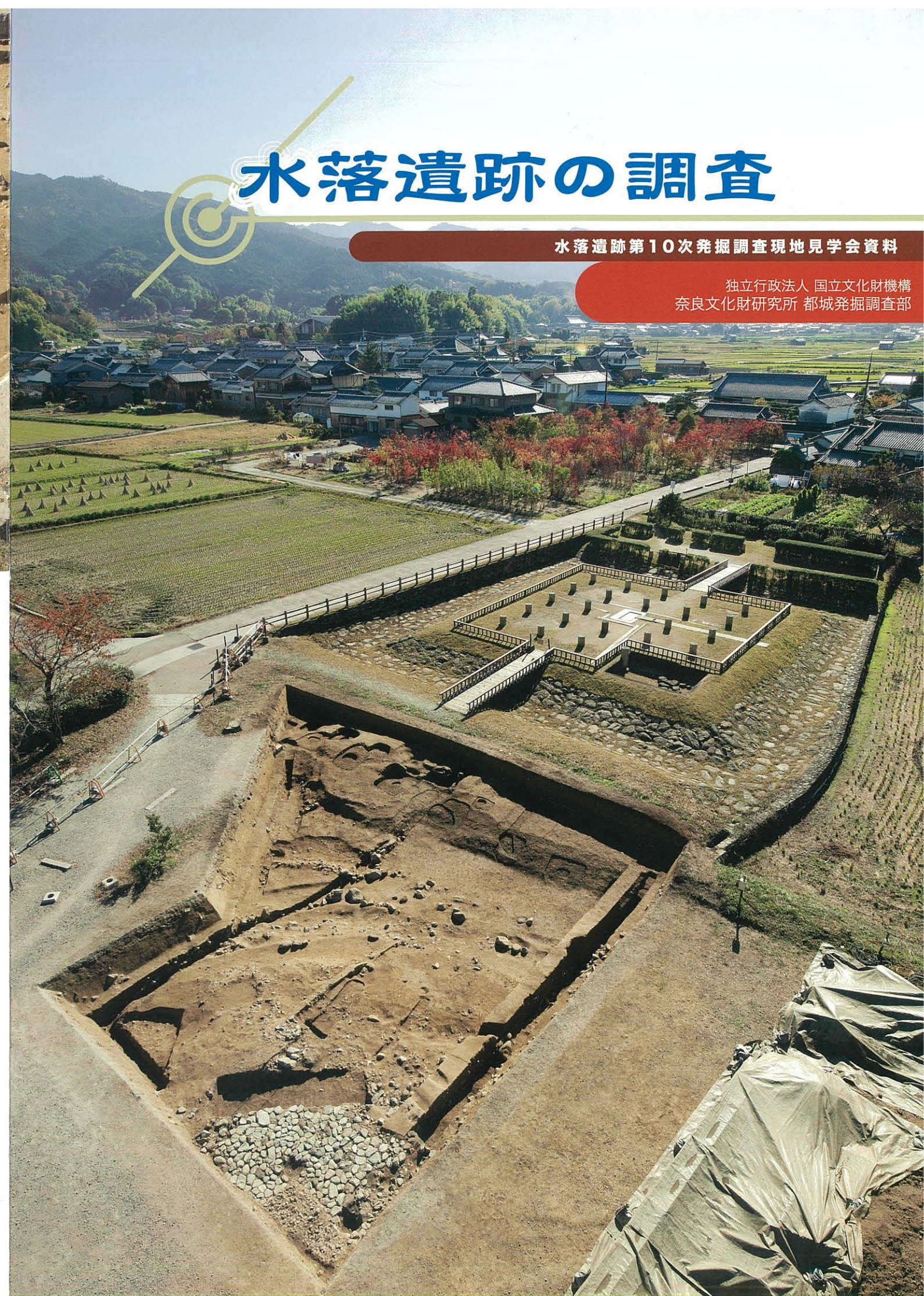
独立行政法人 国立文化財機構
奈良文化財研究所 都城発掘調査部



石敷（西から）



東西棟建物の北側柱列（東から）



●これまでの調査

水落遺跡

1972年の発掘調査で大型基壇建物が発見され、1976年に国指定史跡となりました。1981年からの史跡整備に伴う発掘調査により、建物が正方形の基壇の中央に堅固な地下構造をもつ総柱様建物であることや、基壇内部に木樋暗渠と銅管が敷設された特殊な構造が確認されました。この基壇建物の周りを石貼りの溝と掘立柱建物が囲んでおり、特に南側には東西方向に長い掘立柱建物が同時期に建っていたことが確認されています。基壇建物の特異な構造と出土した土器の年代から、さいめい齊明天皇6年（660）に皇太子のなかのおおえのおうじ中大兄皇子が造った水時計である漏刻台と考えられています。

石神遺跡

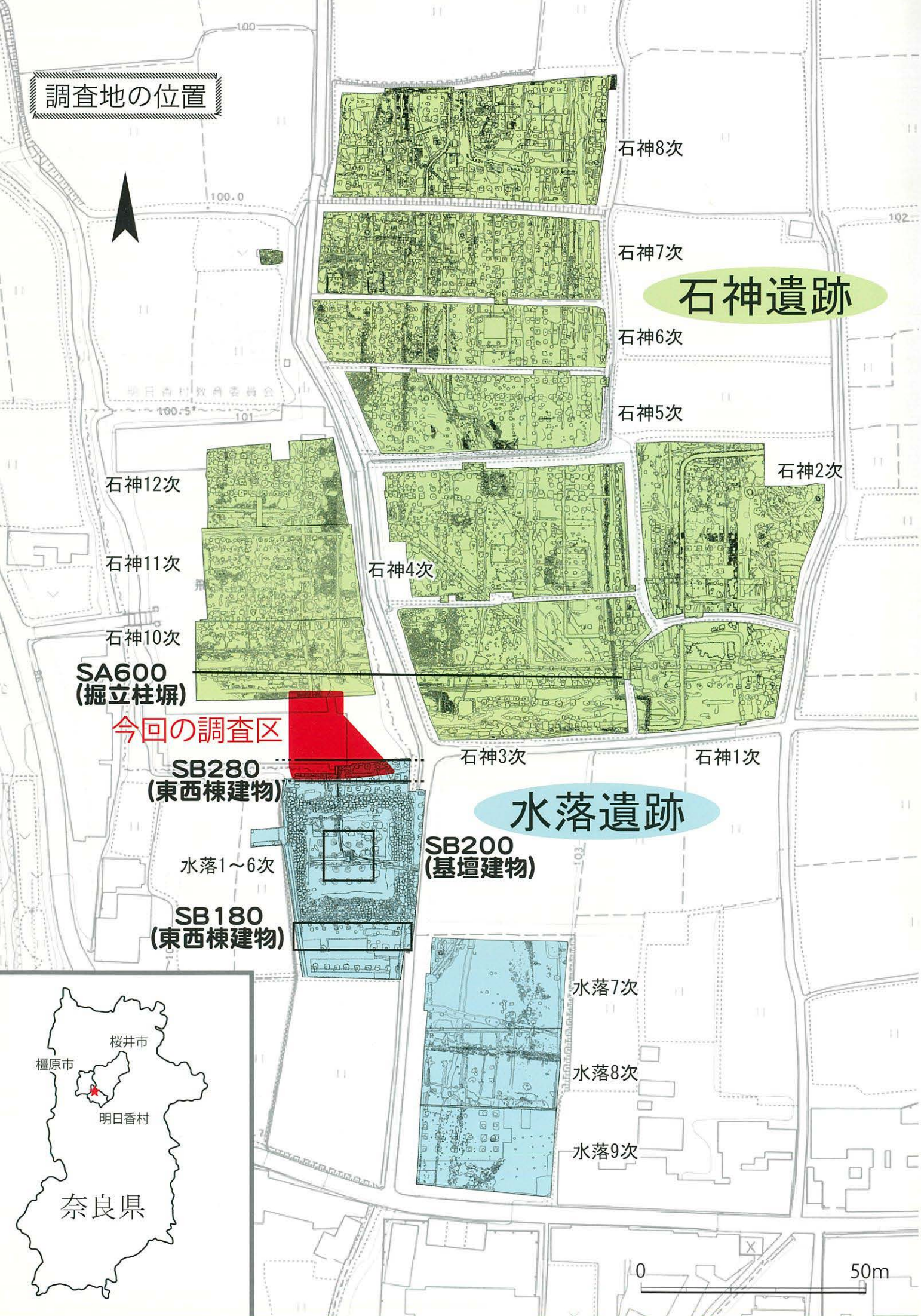
石神遺跡は1902年に須弥山石と石人像が出土した遺跡で、現在までに21回に及ぶ発掘調査が行われています。発掘調査では7世紀中頃の石組池や建物の遺構が確認され、『日本書紀』の記述にある齊明朝の外国の使節たちを饗宴する場であったこと、またその後の7世紀後半の天武朝においては官衛的な施設に改造されたことが明らかになっています。

●今回の調査成果

今回の調査区は、水落遺跡の北辺で石神遺跡に接する区域に当たります。両遺跡を一体として保護していくことを目的に発掘調査を行いました。調査の結果、調査区の中央を横断するように中世以降の流路が通っており、古代の遺構面は残りがよくありませんでしたが、現在までのところ以下のことが明らかになっています。

1. 水落遺跡の基壇建物から北側に続いていた銅管や木樋が、石神遺跡へ向けて直線的に延びることが判明し、両遺跡が強い関連をもつことを再確認しました。
2. 水落遺跡の基壇建物の北にある東西棟建物（SB280）の、北側の柱列を確認しました。これにより、この建物が基壇建物とその南側の東西棟建物（SB180）と造営方位・柱筋がほぼ一致した建物であることがわかりました。また、その後建てられた東西棟建物（SB285）の西北隅の柱穴も確認しました。
3. 石神遺跡から南に延びる石敷が、今回の調査区でも水落遺跡に向けて同じ高さで続いていることがわかりました。通路状の機能をもっていたと考えられます。

調査地の位置



遺構配置図

